

## 追悼

### 大阪の川名先生—ご業績と思い出

大阪工業大学教授 寺内 信

川名吉エ門先生が平成10年9月6日ご自宅でお亡くなりになりました。安らかなご永眠とのことでした。心からご冥福をお祈り申し上げます。

川名先生は鹿児島県立大学建築学科から昭和29年3月大阪市立大学理工学部建築学科講師として大阪に移られ、昭和30年8月助教授、昭和34年4月教授に就任されました。昭和32年4月から中澤誠一郎先生の後を承けて都市計画研究室の講座担当になられ、昭和33年2月「小学校校区よりみた都市住区構成」により東京大学から工学博士を授与されました。昭和39年4月から大阪市大現職のまま東京都立大学工学部教授を兼任されましたが、翌昭和40年3月大阪市大教授を辞され東京都立大学に移られました。大阪在任11ヶ年でありましたが、多くの業績と多方面への影響を残されました。

大阪市立大学は戦後事情もあってキャンパスが分散しており理工学部は扇町の仮住まいでした。後年杉本町に統合されますが先生のご在任中は扇町学舎のみで過ごされました。講座担当になられた頃から大学院も徐々に充実し、多くの都市計画専門家が育ちました。研究室では外部との交流が多く、それらの人達を通して実務を吸収するとともに研究室のレパトリーも拡がり、この経緯から研究、実務、行政と多くの人脈を築かれたのであります。

大阪で取り組まれた課題として阪神都市協議会にかかる一連の調査計画があります。住宅の適正配置に関する総合調査、商業地、工業地の基礎調査からその成果を「阪神都市圏基本計画への課題」として総括されました。こうした研究は昭和35年夏に実現した阪神・国連調査へと展開します。合同調査団が形成され国連側チームはA.ワイズマンが代表、日本側チームは川名先生が副委員長格として実質上のとりまとめ役をつとめられました。昼夜を問わず奔走された先生のご苦勞でようやく



故 川名吉エ門 氏

本会の名誉会員川名吉エ門氏には平成10年9月6日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

日本側の面目を果たしたのであります。

30年代後半には先生は地方計画に関心を移されます。土地利用計画の分析研究、大阪中央環状線沿道拠点開発などは、当面する都市圏の基盤整備にかかる問題提起でありました。同様に「近畿は一つ」の資料集刊行も計画調整の必要性を問う試みでした。都市総合計画にも関心を示され、その基本的な考え方を行政担当者向けの手引きとしてまとめられ、市町村総合計画策定に有効に役立ったといわれております。

都市設計にも関心をもち、団地設計について研究室での勉強会から始まり、昭和34年春の住宅公団団地設計検討会における基調講演へと展開します。その後いくつかのプロジェクトも手がけられ、それらの成果は鈴蘭台開発計画（都市計画学会賞）に結実します。昭和33年に作成した茨木市基本計画もまたマスタープランの先駆けでしたが、

時期が早すぎたことから注目されなかったのが残念でした。

このように川名先生は先見性のある課題を選ばれておられますが、先生の意とは異なる事態から苦悶されていたのではないかと考えます。穏和な先生ですが、内面的にはかなり厳しい面が見られ決して妥協されませんでした。ニュータウン計画には先生なりの疑念から徹頭徹尾冷ややかに対峙されていたあたりにその一面がうかがえます。先生は非常にお酒が強く、最後までお付き合いすることは大変でしたが、終始静かにお飲みになったように思います。もう一度関西へ戻ってきて頂きたいと誰もが望んでおりましたが、それは叶えられませんでした。今でも残念に思っております。

## 川名先生のご業績と思い出

工学院大学建築学科教授 石田 頼 房

本学会名誉会員 川名吉エ門先生は、1998年9月6日狭心症でご逝去されました。1915年のお生まれで、享年83歳でした。先生は1965年から18年間にわたり理事として本学会運営に貢献されました。

先生は、1941年東京大学工学部建築学科をご卒業になり、直ちに満洲国総理庁高等官補となり渡満されました。敗戦後日本にもどられ、住宅営団技師、総理庁技官、埼玉県技術吏員などを勤められました。住宅営団では、営団閉鎖の業務などに携わったとうかがっております。

1951年鹿児島県立大学工学部建築学科講師となり、教職に転じられました。1954年に大阪市立大学工学部建築学科に移り、1955年助教授・1959年教授となられ、1965年まで11年間にわたり都市計画の研究・教育に尽力されました。この間、1959年に論文「小学校校区から見た都市住宅構成」で東京大学より工学博士の学位を授与されました。

1964年には東京都立大学工学部建築工学科の教授となり、1978年3月定年退職されるまで13年間、都市計画の研究・教育に当たられ、多くの優秀な都市計画専門家・研究者を育成されました。また、学内の多くの都市研究者とともに、東京の大都市問題に関する共同研究を進めるとともに、学際的

な都市研究所をつくるために中心となって尽力されました。先生は、よく東京都がつくった大学だから2、3年で出来ると思ったのにと、ぼやいて見せながら、毎年せつせと都市研究所の構想を書き直しておられました。その研究所が、先生の構想よりささやかな形ですが都市研究センターとしてスタートし、先生が初代所長になられたのは1977年のことで、東京都立大学においてになって12年がたっております。しかし、都市研究センターが、その後、研究面で多くの業績をあげ、現在では都市研究所と博士課程を持つ大学院都市科学研究科に成長できたのは、先生が構想力豊かに築いて下さった基礎があればこそだと思います。

先生は、東京都立大学定年退職後、同大学名誉教授になりましたが、引き続き日本女子大学家政学部住居学科教授に就任され、1983年まで都市計画教育に当たられるとともに、大学院修士課程の設立に参画されました。

東京に移られてからのご研究、あるいは計画行政関係のお仕事で印象的なものを一、二思い出すままあげてみます。東京都立大学の都市研究グループが1968年にまとめた研究書に『都市構造と都市計画』があります。この本自体が学際的都市共同研究のあり方を示したという意味で日本の都市研究のマイルストーンといえるものですが、川名先生は共同研究の中心的役割を果たされ、その中の「住宅問題の展開」「昭和前期の都市計画」という二章を執筆されましたが、これは都市計画史という新しい学問分野に先鞭を付けた研究として高く評価されています。

先生は、多くの政府関係・自治体関係の審議会委員をされていますが、1966年1月から1968年5月まで宅地審議会の専門委員をされました。宅地審議会は、この間の1967年3月に1968年都市計画法の区域区分制度の基礎となった第六次答申をまとめており、川名先生は、そのとりまとめの中で中心的役割を担われました。私も、スプロール問題と区域区分制度には関心を持っておりましてので、先生が持って帰られる膨大な資料を見せていただき、一つの制度が生まれる背後にある様々な経緯と、その中での先生のご努力を興味深く感じたことを覚えております。